

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

彼女からの贈り物

笠間中学校二年

河合 かわい

想史 そうじ

教室に響き渡る甲高い笑い声。皆が笑っている。そういう僕も笑っている。ああ、やっぱり楽しい。

そう思った刹那、教室、甲高い笑い声、さっきまで視ていた、聴いていたモノが、何かに吸い込まれるように、一瞬にして消えた。

そして僕は目を覚ます。

西から赤い光が差し込み、幻想的だった。

壁に掛かっている時計で今の時刻を確認する。五時四十五分、それが今の時刻だった。

自分が寝る前、何をしていたか思い出せなかった。

自分の脳内にかかった、濃い霧を振りはらうように、思い出す。

俺は、朝起きて、朝食を食べてバイトに行った。それで帰ってきて大事な予定があったような気がしたから、横になってたら、いつのまにか寝ていた。

ここまで思い出したが、「大事な予定」が何か分からなかった。なので自分のスマートフォンで少し急いで「大事な予定」が何かを探した。

スマホ内のカレンダーで今日の日付、六月一日の予定を見ると一瞬で思い出した。そこには「中学の同窓会」と表示されていた。

「まさか、あんな大事な事を忘れるなんて…。」

と、俺は電車で揺れる中、つぶやいた。

俺の名前は川田 創助。二十六歳でフリーターだ。なので今着ているスーツは、とても着心地が悪い。

フリーターなので、当然親から就職しろとこの二年で嫌というほど言われた。

でも、正直俺は気にしていなかった。俺の一番楽しかった中学時代の同級生も皆今の俺と、似たようなものだったから。だから俺と同じ奴は少なからずいる、そう思っている。

電車を降りて、十分歩いて着いた場所は、地元じゃ有名な居酒屋だった。しかもここは中学校の校区内なので妙なつかしきを感じた。

店に入ると、店員が、

「桜野中学校の卒業生ですね。」

と言ったので、はいと俺は答えた。

案内された部屋には懐かしい顔触れがそろっており。俺はとてもテンションが上がった。

昔から変わっていない奴もいれば、あんな奴いたか？という奴もいる。だけど二人だけはすぐに分かった。

「モッチー！タケ！」

色んな声が飛びかう中、俺の出した声は二人にはっきり届いた。二人はそろって、

「カタ！」

と、中学の頃のあだ名を口に出した。その刹那、俺の目には楽しかった教室の風景が映った。

それからはモッチーとタケで十一年ぶりにくだらない話して盛り上がる。先生によるスピーチもあったようだが、その時間も、俺たちはしゃべっていた。しかし、それまでは全て中学の話で盛り上がっていたが、次からは、高校の話になった。

「そういえばさあ、モッチーってどこの高校に行ってたんだっけ？」

タケの細い目がモッチーの方に向けられる。そして、モッチーは語り始める。

「となりの町の工業高校だよ。そこから興味が広がって、大学もその路線で決めたよ。それで今は、電気会社に勤めてんだけど。」

俺は内心とても意外だった。なぜかという、モッチーは昔とても機械オンチだったからだ。その頃携帯電話が普及し始めて、モッチーがこの三人の中で一番最初に買ってもらった。だが、モッチーは電話、メールともに使い方が分からず、俺とタケで教えていたのだ。そのモッチーが電気会

社で働いているとは驚いた。

モッチが口を開く。

「そういえば二人って何の仕事をしているの？」

「え。」

俺とタケは一緒にそんなあっけらかんな声を出した。突然だなと思いつつも、俺はモッチの疑問に答えようとする。

「俺は今。」

「俺はな！」

と、俺の声はタケのうっとうしい声にかき消される。少し腹を立てる俺に気づかないまま、タケは話を続ける。

「スポーツジムで働いてるんだ。昔から体を動かすのが好きだったからな。」

そのとおりだった。タケは運動神経がとてもよく、この三人の中で一番運動できた。というよりも学年で見てもとても目立っていた存在だったからだ。

この二人の話を聞いた後、俺はふと思った。

（あれ？フリーター俺だけ？）

そう思うと、得体の知れない何か覆い被さる。不安だった。周囲に耳を傾ける。必死に探したが、どこからも「フリーター」という単語は出なかった。

「タカ、タカ。」

「え？」

と、モッチの少し高めの声で俺は、はっとした。

「え？じゃねーよ。言えよ。お前の仕事。」

冷や汗が頬を伝った。迷った。真実を言うか、嘘をつくか。そして俺は、

「トラックの運転手。最近は少し仕事になれてきた感じだな。」

と、嘘をついた。初めてだった。この二人に嘘をついたのは。

そこにしばらくなくなって俺は、

「ごめん、ちよっと外の風にあたってくる。」

逃げ出した。さっきまで楽しかったのが嘘のように。

俺は、居酒屋の近くの駐車場に来ていた。

そこで俺は、大学出てからの二年を振り返っていた。

就職をせずに、アルバイトして、寝て、食って、ソシヤゲして、そんな事しかしてない。

何で気付かなかったのか。二年も続いていたのに。

「はあ…。」

ため息しかでなかった。自分に呆れて。就職しなきゃ、そう思うもやる気が出なかった。

そんな事を考えていると、誰かの足音が聞こえた。その足音が聞こえる方向に顔を向けると、女性がいた。小柄でショートカットで可愛らしい顔をしていた。その女性は俺に、

「創助君…？」

その声で誰か分かった。中学二年の時毎日聞いた声だったから。

「恵理…？」

「…うん。」

彼女の名は中西 恵理。中学二年の梅雨から中学三年の始業式前日まで、俺の恋人だった人だ。

「変わってないね。顔。声は変わったけど。」

「そうかな…。」

さっきの考え事が頭に残って明るく振る舞えない。

「…どうしたの？」

「何でもない…。」

俺はそっけなくごまかすが、

「嘘。」

すぐ見破られた。中学の頃からそうだった。周りの人をよく見るから、嘘とかすぐ見破られる。

「……実は。」

口が開いた。彼女を信用したからだ。中学の時もいっぱい支えられたから。そしてさっきあった事を包み隠さず彼女に伝えた。

「えっそんな事があったんだ。」

それから少し沈黙が続いて、再び彼女の口が開いた。

「考え方を変えてみたらどうかかな？」

「え？」

彼女の言っている意味が分からなかった。彼女は話を続ける。

「確かにやる気が出ない気持ち分からもないよ。けどそれは今しか見えてないからだと思う。」

「今しか…見えてないから？」

「そう。ただどこでやっておけば次会う時気が楽じゃない？」

「確かに。」

「でしょ？これなら大丈夫でしょ。」

「うん。ありがとう。」

彼女はすごい。アドバイスが的確だったからもあるけど、人に優しくできるところがすごいと思った。

「どういたしました。あ、そうだ。」

と言いつつ、彼女は俺の手に一枚の写真を渡した。その写真には植物が写っていた。見たことない植物だった。その植物は、緑色の球体が一本の茎に何十個も連なっている植物だった。俺は彼女に、

「この植物の名前何ていうの？」

と聞くと、彼女は答えた。

「その植物はグリーンネックレスっていうの。」

「へえ。」

と、俺は返事したが彼女の言葉は続いた。

「グリーンネックレスの花言葉は…。」
それを聞いた瞬間分かった。それが彼女からのメッセージだと分かった。

次の週の月曜日、俺はある会社の前にいた。あの後俺の決心は固まり、早めに同窓会から帰り、運送会社の採用試験に応募した。そして今日は面接の日だ。胸ポケットに彼女からの贈り物を入れ面接に向かう。
描いた未来を現実にするために。